様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：12102
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009～2011
課題番号：21653049
研究課題名（和文）科学的根拠に基づく当事者共創型コミュニティ・エンパワメントプログラム開発評価研究
研究課題名（英文）Development and Evaluation of Evidence based Community Empowerment Program with Party in Charge
研究代表者
安梅　勅江（ANME TOKIE）
筑波大学・医学医療系・教授
研究者番号：20201907

研究成果の概要（和文）：本研究は、20 年間の追跡調査と介入研究により、「科学的な根拠に基づく当事者共創型コミュニティ･エンパワメントプログラムの開発と評価」を目的とした。臨床的重要性と統計的妥当性を加味しながら有効な項目を抽出して体系化し､「当事者共創型コミュニティ･エンパワメントプログラム」を作成した。プログラムを実践の場で活用し、有効性を確認した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop and evaluate the evidence based community empowerment program with party in charge. Identifying effective items by practical and statistical validation, “Community empowerment program with party in charge” was emerged. Evidence of effectiveness was confirmed along with utilization in practical community.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,000,000	0	1,000,000
2010 年度	1,000,000	0	1,000,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	300,000	3,300,000

研究分野：発達保健学
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学
キーワード：エンパワメント、コミュニティ、当事者共創、開発評価

１．研究開始当初の背景

経年的な効果評価に基づく当事者共創型のコミュニティ・エンパワメントプログラムは、きわめて乏しい状況である。

２．研究の目的

20 年間の追跡調査と介入研究により、「科学的な根拠に基づく当事者共創型コミュニティ･エンパワメントプログラムの開発と評価」を目的とした。

３．研究の方法

(1)当事者と専門職に対するフォーカス・グループ・インタビューに基づく当事者共創型コミュニティ・エンパワメントプログラムの開発

公民館、地区集会所、老人クラブ、小中学校、保健センター、子育て支援センターなどで、世代間交流を促進するコミュニティ･エンパワメントプログラムの当事者ニーズと内容を抽出するため、当事者および専門職に対するフォーカス･グループ･インタビュー

を実施した。
「楽しさ」「共感」「ともにつくる」をキーワードに実際の経験、当事者ニーズ、体験に基づく重要項目などなどを討論の柱として、具体的な内容を詳細に収集した。1 グループあたり原則として約２時間の時間をとり、逐語記録と観察記録を合わせてデータ化した。

(2)追跡データを活用したコミュニティ･エンパワメントプログラムの効果評価
平成元年～20 年に実施したのべ 80,000 名の調査対象者の中から、これまでのプログラム参加者を抽出し、非参加者と比較しながら精神面・身体面の効果の軌跡と関連要因を分析した。

(3)国内外のコミュニティ･エンパワメントプログラムに関する系統的レビューとエビデンス・テーブルの構築
「コミュニティ･エンパワメントプログラム」の開発過程、内容、評価に関する海外先進機関の訪問調査、既存研究の系統的レビューとエビデンス・テーブルを構築した。米国とカナダにおいて開発研究を実施している研究機関を訪問し、情報交換と情報収集を行った。

(4)当事者共創型コミュニティ･エンパワメントプログラム試案の作成
臨床的な重要性と統計的妥当性を加味しながら、有効な項目を抽出して体系化し、当事者共創型コミュニティ･エンパワメントプログラム試案を作成した。

４．研究成果
当事者共創型コミュニティ・エンパワメントの要件として、下記の７点が抽出された。
(1)関係性を楽しむ
コミュニティ・エンパワメントの基盤は「ともに楽しむこと」である。そもそもが「共感に基づく自己実現」に大きく依存するからである。
自発的なかかわりが生まれるような、関係性を楽しむ「開放的な雰囲気」、これと特定できなくても、何かしら自らに帰ってくるものを感じる「互恵性」、そして何よりも「信頼感」が必要である。

(2)価値に焦点を当てる
価値とは、目指す状態を実現するプロセスにおける守るべき基準、または方針といったものである。コミュニティにおいては、これを理念、行動指針、方針などと表現している場合がある。
コミュニティを活気づけるのは、いかにコミュニティや参加メンバーに「価値」をもたらすかである。コミュニティ参加者の集合的な経験を活用するとともに、メンバーがつねに価値をはっきりと認識して、口に出して確認しあうことが有効である。
共有する価値のある知識、課題や新しいアイディア、将来へのチャレンジなどをお互いに十分理解し、影響力を与えることへの「共感に基づく価値」が求められる。これらは参加者による価値付けである。一方で外部者がそのコミュニティをどれだけ価値のあるものか、どのようにして力を引き出すことができるか、の視点が重要である。
さらに活動マニュアルや情報データベースの作成、具体的な技術の向上などという目に見える価値に加えて、仲間意識や帰属意識、探求心や自信、コミュニティへの誇りなど、目に見えない価値の及ぼす効果は計り知れない。
多様な価値を創造するために、散在している貴重な知恵を束ね、個別的な視点ではなく全体を見通した協働の方法を参加メンバーで検討する。その結果、全体のレベルを引き上げ、本質的な前進の方向性が明らかにできる。

(3)つねに発展に向かう
どんな組織や地域もコミュニティである限り、ひとつの状態に留まっていられない存在である。参加メンバーのダイナミックなかかわりにより、つねに未来に向けた何らかの動きをともなう。硬直化することなく、さまざまなメンバーを柔軟に取り込み、環境に適応しつつ、より意味のある活動を展開する。いわば「生きたコミュニティ」を育むのがコミュニティ･エンパワメントである。コミュニティ･エンパワメントはコミュニティに本来備わっている力を引き出すことで、コミュニティそのものを変容させる可能性がある。そのためには、「つねに発展に向かう」仕組みをあらかじめ備えておくことが重要である。

(4)柔軟な参加様式
コミュニティには、さまざまな人の参加が原則である。その中には下記のようなメンバーが存在する。
①コーディネーター：企画･調整のリーダー的な役割を担う人
②コア･メンバー：企画や調整に積極的にかかわる人
③参照メンバー：必要に応じて専門的な情報や技術を提供する人
④活動メンバー：日常的にかかわる人
⑤周辺メンバー：めったに参加しないが、関心のあるときには参加する人
どのレベルのメンバーも、あたかも中心的な役割をいつでも果たすことができる気持ちにさせるコミュニティ活動を組むよう配

慮する。
　コミュニティ･エンパワメントを成功させるには、参加を強制するのではなく、磁石のように自然に心地よくそばに存在してしまう雰囲気作りが有効である。また、どのメンバーもいつでもコアメンバーや活動メンバーとしての活動が可能なよう、柔軟な参加様式を維持することが重要である。

(5)近親感と刺激感
　コミュニティ･エンパワメントには、硬柔あわせ持つこと、すなわち硬い部分と柔らかい部分、ピリッとした緊張感とリラックスした安心感の両側面を持ち合わせ持つことで、よりコミュニティを活性化することが可能となる。
　メンバーの個人的な関係が強ければ、コミュニティ全体での活動は中身の濃いものとなる。日常的な、私的なやり取りの中から得られた信頼感を、新しい活動に結びつけたり、逆に全体の活動から１対１の緊密な関係を育んだりと、近親感と刺激感を連動することの双方向的な効果が期待できる。
　一方で、コミュニティ･エンパワメントは、日常的な職場などの関係性から解き放たれた「新しい立場」としての近親感と刺激感を得る場としても有効である。そのためには、定例的な活動と刺激的な新しい活動を組み合わせて、これまで出会ったメンバーとは違う対象との人間関係や、刺激的なテーマを拡大してメンバーの関心を引き付けるなどの工夫が必要である。

(6)評価の視点
　コミュニティ・エンパワメントにおける評価とは、「有効性」すなわち「価値」を明らかにすることである。コミュニティや関係性の意味を明らかにし、その目標、活動結果、影響力、コストに関する情報を生む一連の過程である。
　コミュニティ・エンパワメントを継続的に推進するには、メンバーがコミュニティに帰属している価値をつねに認識できる状態を維持する必要がある。コミュニティ・エンパワメントのプロセスの中で適宜評価し、状況を客観的に測定することで、コミュニティ自体が、どの程度力を持っているのか、あるいはどの程度力を持てるように変わることができるのか、顕在力と潜在力を明らかにすることができる。さらに、新しい方策の提言、将来の課題の予測を可能とするものである。
　評価にあたっては、コミュニティの本質を見抜くことのできる、内部の者と外部の者の両者による評価が必要である。

(7)リズムをつくる
　空海は五大に響きあり、すなわち自然のすべてにリズムがあると言った。人間もコミュニティも、伸びる時期と留まる時期、繰り返す時期と変容する時期など、リズムが成長を促進する点では共通している。
リズムは鼓動である。確実にエネルギーを全身にいきわたらせる波動となる。コミュニティは、このリズムにより活気づけることができる。
　多くのメンバーに触れる刺激と、親密な人間関係を醸成する機会との釣り合いを取る、新しいアイディアを生み出す討論会と既存知識の普及を意図する研修会とのバランス、多様なメンバーの出入り、さまざまな活動の実施時期のシンコペーション、交流の周波数、発展への鼓動など。もっとも大切なのは、その時期に応じたリズムを意図的に生み出すことである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

① Anme T, Shinohara R, Sugisawa Y, et.al, Continuity of social interaction and mortality: eight-year population-based prospective study for the elderly, Japanese Journal of Human Science of Health-Social Services, 18(1), 2011, 18-27. 査読有

② Sawada Y, Shinohara R, Sugisawa Y, Anme T, The Relation between the Maintenance of Physical Functions and Social Interaction among Community-dwelling Elderly People: A Six-year Follow-up Study, Ournal of Physical Therapy Science, 23(2), 2011, 171-175. 査読有

③ Gan-Yadam A, Tanaka E, Anme T, Gender differences in health seeking behaviour and empowerment needs in Mongolia, Japanese Journal of Human Science of Health-Social Services, 18(1), 2011, 52-58. 査読有

④ 平野真紀，川島悠里，安梅勅江，高齢者支援に向けたコミュニティ・エンパワメント展開のためのニーズ把握：フォーカス・グループインタビューを用いて，厚生の指標，58(7)，2011, 30-38. 査読有

〔学会発表〕（計９件）

① Anme T, Kawashima Y, Social interaction as an effective tool for dementia prevention: six-year follow-up study , The Gerontological Society of America 64th Annual Scientific Meeting , 2011.11.22 Boston (USA)

② Anme T, McCall M, Social interaction and longevity among a rural Japanese community: twenty years of study, The Gerontological Society of America 64th Annual Scientific Meeting , 2011.11.23 Boston (USA)

③ Wu B, Tong L, Anme T, Association between social interaction and the functional status of elders in Japanese rural community: a 3-year follow-up study, 8th SYSTED, 2011.9.16 Tokyo (Japan)

〔図書〕（計３件）

① Anme T, McCall M, Empowerment in Health and Community Settings, In Muto T. Edited, Asian Perspectives and Evidence on Health Promotion and Education, 162-172, Springer: London, 2010

② 安梅勅江、コミュニティ・エンパワメント、働くことの喜びとは何か 潜在能力の組織的発揮，日本能率協会編、1-245. 2010

③ 安梅勅江、日本一健康長寿　誰もが生き生きまちづくり-飛島 20 年の軌跡と成果-，飛島日本一健康長寿研究会，1-96. 飛島村 2011

〔その他〕

エンパワメント研究会　ホームページ
http://square.umin.ac.jp/anme/research/anme/EMP2.html

６．研究組織

(1)研究代表者

安梅　勅江（ANME TOKIE）
筑波大学・医学医療系
研究者番号：20201907

(2)研究協力者

伊藤　澄雄（ITO SUMIO）
飛島村すこやかセンター・係長

篠原　亮次（SHINOHARA RYOJI）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
研究員

杉澤　悠圭（SUGISAWA YUKA）
筑波大学・医学医療系・
研究員

澤田　優子（SAWADA YUKO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
研究員

童　連（TONG LISN）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
大学院生

田中　笑子（TANAKA EMIKO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
大学院生

冨崎　悦子（TOMISAKI ETSUKO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
大学院生

望月 由妃子（MOCHIZUKI YUKIKO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
大学院生

渡辺 多恵子（WATANABE TAEKO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
大学院生

恩田　陽子（ONDA YOKO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
大学院生

徳竹 健太郎（TOKUTAKE KENTARO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
大学院生

平野　真紀（HIRANO MAKI）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
大学院生

森田　健太郎（MORITA KENTARO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
大学院生

Amarsanaa Gan-Yadam
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・
大学院生

呉　柏良（WU BAILIANG）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

川島　悠里（KAWASHIMA YURI）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

難波　麻由美（NANBA MAYUMI）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

松本　美佐子（MISAKO MATSUMOTO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生

杉田　千尋（CHIHIRO SUGITA）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生